

京都大学言語学懇話会
2007-2008 年度 活動報告

例会報告

第75回例会

日時・場所 2007年12月15日(土) 13:30-16:45 於京大会館

研究発表 「タンザニア・ケレウエ語調査報告-言語の概要と女性語の話-」
小森 淳子 (大阪大学)

「実験データを利用した統語論・意味論的研究-脳活動や処理時間を通して言語について何がわかるのか?」
酒井 弘 (広島大学)

第76回例会

日時・場所 2008年4月12日(土) 13:30-16:45 於京大会館

研究発表 「日本語の「ことがある」構文の時制構造」
大浦 真 (大阪大学非常勤)

「新村出先生と方言」
堀井 令以知 (関西外国語大学)

第77回例会

日時・場所 2008年7月12日(土) 13:30-16:45 於京大会館

研究発表 「ラテン語の母音脱落について」
西村 周浩 (京都大学)

「“Prolog 的”意味論の構築と展望」
上山 あゆみ (九州大学)

タンザニア・ケレウエ語調査報告 — 言語の概要と女性語の話 —

小森 淳子

(大阪大学世界言語研究センター)

ケレウエ語はタンザニア北西部、ビクトリア湖南方に位置するウケレウエ島で話されているバントゥ諸語の一つで、話者は約 10 万人である。バントゥ諸語は Guthrie(1948)の分類を基準に、アルファベットと数字で分類番号を示すのが通例となっており、ケレウエ語は JE24 である。ウケレウエ島では、同じく JE グループに属するジタ語やカラ語と共存しており、相互理解が可能である。またタンザニアの公用語であるスワヒリ語も上位言語として併用されており、興味深い多言語状況を示している。

本発表では、発表者が 1997 年から 2004 年の間に現地で行なった調査にもとづき、スライド写真とともにケレウエ語の概要と女性語について紹介した。

言語の概要については、膠着言語の典型ともいえるバントゥ諸語の言語特徴 — 名詞クラスと動詞構造 — をふまえて、ケレウエ語の特徴に言及した。ケレウエ語の名詞クラスは名詞接頭辞の形態と修飾語の呼応から 18 のクラスを認めることができる。名詞修飾語はその種類によって「形容詞接頭辞」をとって名詞と呼応するもの（形容詞）と「代名詞接頭辞」をとって呼応するもの（指示詞など）に分けられる。動詞は、動詞語根を中心に前後にいくつもの接辞をとる構造をなしており、どのような接辞をどのようにとるかという事が動詞の記述の中心となる。統語論との関わりで特に興味深いのは、複数とることができる目的接辞と、派生接辞によって形成される適用形と使役形である。適用形はさまざまな意味を表す項を新たに取るが、ケレウエ語では「道具」の項をとるときは、使役形を用いる。

「女性語」は、ケレウエの女性が婚家で教えられる言い換えの言葉である。女性は舅の名前を決して発声してはならず、その代替語として「女性語」がある。女性語はすべての人名、すべてのケレウエ語の単語に見出すことができ、女性だけが用いる一種の「集団語」として発展してきたとも考えられ、今後さらに調査したい事象である。 (こもり じゅんこ)

実験データを利用した統語論・意味論研究 —脳活動や処理時間を通して言語について何がわかるのか？

酒井 弘

1970年代、80年代の言語理論においては、研究遂行上の方略として言語に関する知識の研究と、言語の運用及びその生理学的基盤に関する研究との目標を分けて考えることが一般的であり、後者の目標を目指して本格的に研究に取り組むのは、まだ時期尚早であるとする見方が一般的だった (Chomsky, 1988)。しかし1990年代から2000年代に入ると、それまでの研究の蓄積を踏まえて、言語を実際に運用する認知メカニズムはもちろんのこと、人間言語の進化過程や、生物学的基盤も現実的な研究目標として語られるようになってきた (Hauser, Chomsky & Fitch, 2002)。このような展開の中で、研究に使用される方法自体も変化しつつある。研究対象を静的な「言語に関する知識」として捉える限り、コーパスや母語話者の内省的判断のように、時間的側面を切り離れたデータを利用することが効率的である。しかし対象を、人間が言語を理解・産出するために実際に使用する認知システムとして捉えた場合、時間軸に沿ったダイナミックな処理の様相や処理を司る脳の皮質領域の生理的特性など様々な情報の有用性が相対的に高まってくる。そこで本発表においては、特に統語論・意味論の研究領域で、従来は活用されることの少なかった上記のような「実験データ」を使用した研究を紹介する。具体的な研究の事例として、fMRIを使用した敬語文処理の研究と、読文時間及び事象関連電位の計測を指標とした日本語かきまぜ文処理の研究の成果を報告する。 (さかい ひろむ)

日本語の「ことがある」構文の時制構造

大浦 真

本発表では、日本語の「ことがある」構文の時制構造について扱った。「ことがある」は(1)のように、タ形、もしくは、基本形と結び付き、「したことがある」「することがある」という形式になる。一般に「したことがある」は過去の経験や完了の意味を表し、「することがある」は可能性や繰り返しを表すものとされている。

(1) a. 健はこれまでに三度選挙に出たことがある。

b. この路線のバスはよく遅れることがある。

この「ことがある」構文は「ことがある」が一つの述語であり、さらに、従属節(コト節)を取るような複文構造を持っているものとすることができる。この上で、本発表では、形式意味論において時制を扱う際に用いられる「インターバル」を用い、「ことがある」構文全体の時制構造が「ことがある」の時制とコト節の時制、および、コト節の参照時からどのように導き出せるか考察を行った。

まず、コト節も「ことがある」も過去を表すタ形か非過去を表す基本形を取る。これにより、「したことがある」「することがある」「したことがあった」「することがあった」という四つの形式が作られる。さらに、コト節の参照時は、主節時、もしくは、「ことがある」の参照時、つまり、発話時と一致する。

「したことがある」は、基本形の「ある」が非過去を表すことから、「現在から見てある経験が存在する」という意味だけではなく、「未来のある時点から見てある経験が存在する」という意味が出てくる可能性があるが、「ことがある」そのものの意味から、そのような意味は出てこないことを導いた。さらに、(2b)のように、発話時までに関わっていない事態には「したことがある」は用いることができないことも導かれる。

(2) a.*明日には、健はこの本を読んだことがある(だろう)。

b.*健は昨年死んだことがある。

また、「することがある」については、「現在の可能性」だけではなく、「未来の可能性」も表すことができることも自然に導かれる。さらに、意味が似ている「したことがある」と「することがあった」について、前者は参照時を表す「三年前には」のような語句と共起できないことも導き出した。

(おおうら まこと)

正誤表

p.246

15 行目「当時のお住まいは烏丸にあった」→「当時のお住まいは新烏丸下切通にあった」

下から 6 行目「そのとき、私もメンバだった」→「戦後、私もメンバだった」

下から 5 行目「学会としての最初の方言調査で対馬へ行かれる。」削除

新村出先生と方言

堀井 令以知

本年は京都大学に言語学講座が創設されて百年を迎えるので、初代講座担任であり、『広辞苑』の編者として著名な新村出先生についてのエピソード、同時代の研究者たち、当時の学界の様子などを通して、先生と方言のかかわりについて紹介する。

先生は明治 29 年、東京帝国大学に 9 月に入学された。その当時言語学は「博言学」と呼ばれていた。幕末に出版された英和辞典では、*linguist* に対して「言辞学者」という訳語が与えられていた。「言語」を「ゲンゴ」と読むのはそもそも少し変なのかもしれない。もともとは「ゴンゴ」、「ゲンギョ」と読まれていた。明治 32 年、新村先生は東京帝国大学を卒業、当時の卒業証書は大分大きかったという。同年、大学院（旧制）に入学。明治 35 年、東京高等師範学校の教授に着任。当時の講義内容は『新村出全集』に詳しい。明治 37 年、東京帝国大学助教授を兼任。そのころ「東西語法境界線概要図」を作成する。「見よ/見ろ」、「一だ/ーじゃ」といった方言間の違いを特徴付ける形式の等語線をひくための調査を行なわれた。明治 42 年、京都帝国大学文科大学教授（後、官制改正により京都帝国大学教授）に着任。当時のお住まいは烏丸にあった。「烏丸」は、今は「カラスマ」と読むが、江戸初期から中期にかけての文献によって、はじめは「カラスマル」と読まれていたのが、「ル」が落ちて「カラスマ」に変化したことがわかる。他にも「室町」が古くは「モロマチ」、「夷川」が「エベスガワ」だったことがわかる。地名の変遷も、先生のご興味の一つだった。明治 43 年、文学博士となられる。もともと西洋史に興味をお持ちだったが、このころからギリシャ語に関心を示し、ギリシャ語の講義を担当される。明治 44 年、京都帝国大学付属図書館長に就任。定年まで館長を務められた。大正 9 年に上京区の木戸孝允旧邸別宅に引っ越される。この書齋で後に『広辞苑』の執筆を始めることとなる。昭和 6 年近畿方言学会を組織される。そのとき、私もメンバーだった。昭和 13 年、日本言語学会を創立し、初代会長となられる。学会としての最初の方言調査で対馬へ行かれる。昭和 11 年に京都帝国大学を退官されてからは、孫を愛しんで俳句を読まれたりもされた。昭和 25 年、日本イタリア学会の前身となる日本ダンテ学会を創立された。そして、自宅の書齋「ホトトギスの間」で、広辞苑の執筆を始められた。

(ほりい れいいち)

ラテン語の母音脱落について

西村 周浩

母音脱落は、ラテン語の歴史上、あらゆる時代において観察される現象である。そのため、時代ごとに異なる要因が働いて母音脱落が生じている可能性があり、このことが生起条件の記述を困難にしている。Mester (1994: 37-43)は、ラテン語が bimoraic trochee をフットの単位としているという前提に立ち、文学時代の例を分析、その結果、フットの形成過程で置き去りにされた音節が、母音脱落の標的になっていることを解明した(例えば、(lā)ri·dī ‘bacon’ [gen.sg.] > (lar)·dī)。しかし、このプロセスは、前文学時代の母音脱落には適用されない。むしろ、Zawaydeh (1997: 202)がアラビア語について提案した“*Light Light constraint”(軽音節の連続に対する制約)に高い機能性が認められる(例えば、*deksītēros > dexter ‘right’, bālīnēum > balneum ‘bath’)。したがって、ラテン語の母音脱落を引き起こす制約には、予想通り、歴史的な変遷を唱えることが可能である。

前文学時代・文学時代のいずれにおいても、初頭音節は母音脱落の標的になっていなかった。この点で、CrVCにおける母音脱落は言及を要する。語中・語末でも観察されるが(例えば、*agre-lo- > *agrlo- > *agerlo- > agellus ‘small land’; ākris > *ākṛs > ācer ‘sharp’)、初頭音節においても例が見られる(*krinō > cernō ‘sift, distinguish’)。もし、前文学時代の初頭音節強勢付与規則がすでに定着していたとすれば、この変化は強勢音節でも起こっていたことになり、CrVCにおける母音脱落は強勢の位置と無関係であるという推論が成り立つ。

VrVs#の語末音節における変化も、母音脱落の記述を複雑にしてきた。rに後続する母音の「脱落」(さらにsも)は、全く恣意的である(gener ‘son-in-law’ < *generos vs. properus ‘quick’)。解釈の一つとして、母音の「脱落」が原則で、不履行の場合は、母音間の子音がrでないものからの類推と考えられるかもしれない。しかし、「脱落」を示す例は、親族名詞など人間の特性を表わすものが大部分を占め、絶対語末のrが本来的な pater ‘father’ などとの意味的・形態的な関連を示唆する。VrVs#における母音の「脱落」は、規則的な音韻変化とは言い難く、意味の面から触発された形態的な改変であると言えるだろう。

参考文献

- Mester, R. A. 1994. The quantitative trochee in Latin. *Natural Language and Linguistic Theory* 12: 1-61.
- Zawaydeh, B. A. 1997. On an Optimality-theory account of epenthesis and syncope in Arabic dialects. In *Perspectives on Arabic linguistics X: Papers from the tenth annual symposium on Arabic linguistics*, ed. M. Eid and R. R. Ratcliffe, 191-213. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

(にしむら かねひろ)

“Prolog 的”意味論の構築と展望

上山あゆみ（九州大学）

本発表では、従来のモンタギュー意味論に代表されるモデル理論的意味論とは異なるタイプの意味論の方向性を提案した。タイトルで提示した「“Prolog 的”意味論」という名称は、必ずしも適切でなかったかもしれないが、真理値や真理条件を基礎に置くのではなく、ごく形式的な unification と推論の体系だけで十分なのではないか、という点が主旨であった。

特に重要視したのは、文の構造的側面との対応である。文の意味表示(semantic representation : SR) は、統語部門の出力構造である LF 表示から直接読み取れる情報だけを表すと考える。そのため、SR によっては、その真理条件が必ずしも特定されない可能性も許すことになるが、それは、問題を提起するものではなく、むしろ、言語とは本来そういうものであるという考え方を提示した。

具体的に言及した構文は、1) wh 疑問文、2) 不定名詞句のいわゆる存在量化的解釈、3) 複数名詞句のグループ解釈と分配解釈、4) いわゆる基数量化詞どうしのスコープ解釈、5) 存在否定を表す構文で、議論の中心は、2),3),4) であった。不定名詞句は、従来、そのものが存在量化詞であると仮定されるか、存在量化詞に束縛される変項であると仮定されるか、どちらかである場合がほとんどであるが、ここでは、名詞句がリスト (= 典型的には複数の要素からなるグループ) に対応するという分析を提案した。その上で、LF 表示において、それぞれの名詞句がどのリストと対応するか、そしてその名詞句が、リスト全体の性質を記述するものか、要素の性質を記述するものか、どちらであるかが明示されるシステムを紹介した。その結果、複数名詞句の解釈や、特にスコープ関係の解釈に関して、従来分析よりも透明性の高い意味表示が得られたのではないかと考えている。

名詞句をリストに対応すると考える分析に対して最も深刻な問題となりうるのは、存在否定の分析である。それを含めて、今後の課題としたい。

(うえやま あゆみ)

「京都大学言語学研究」(28号)の原稿募集について

京都大学言語学研究(28号)の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 提出原稿

- 原稿種別は以下の通りとする。
 - － 研究論文、研究ノート、懇話会要旨
- 完全原稿を提出すること。
- 印刷原稿、電子記録媒体(FD、MO、CD-Rなど)、もしくは電子メールでの投稿を受け付ける。別途用紙もしくは電子ファイルに以下の項目を記載して提出すること。
 - － 題目
 - － 執筆者名、ふりがな
 - － 原稿種別(研究論文、研究ノート、懇話会要旨)
 - － ページ数(要旨は含めない)
 - － 所属機関
 - － 連絡先(郵便番号、住所、電話・FAX番号、e-mailアドレス)
 - － 原稿の分野を表すキーワード(3～5個)
 - － 要旨を英語以外の言語で提出する場合は英文タイトル
- 電子ファイルで提出する場合は、PDF形式で提出すること。
- 提出原稿に特殊なフォントが含まれている場合、当該フォントが埋め込まれているPDFで提出すること。
- PDF以外のファイル形式で提出する場合は編集委員会までご相談下さい。

2. 研究論文

- **原稿枚数** 原則として、図表などを含めA4版用紙30枚以内とする。これを超える原稿についても投稿を受け付けるが、採用された場合でも、掲載が第29号以降になることがある。
- **文字のサイズ** 日本語論文は明朝体12ポイント(1行37字程度)・1ページ35行程度、欧文論文はTimes系12ポイント・1ページ35行程度(1.5スペース程度)とする。
- **原稿の余白設定等** 各ページのマージンを上下左右: 30、35、30、30mmとる。印刷原稿で提出する場合、ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。

- **タイトルと氏名** 1 ページ目のはじめにタイトル（中央揃え）を入れること。タイトルは 14 ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には 2 行分の余白を設け、タイトルと本文はじまりとの間に 4 行分の余白を設ける。匿名査読制のため、本文中に執筆者の氏名は入れないこと。また本人が特定できるような表現はできるだけ避けること。
- **注について** 注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは 10 から 11 ポイントとすることが望ましい。
- **要旨** A4 版用紙 1 枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に 1 行分の余白を設けること。
- **採否** 編集委員会で決定し、原稿受付より 2 ヶ月以内に採否を連絡する。
- **原稿締切日** 原稿は随時受け付ける。ただし、2009 年 6 月 30 日を過ぎて到着した論文については、採用された場合第 28 号ではなく、それ以降の号への掲載とする。

3. 研究ノート

原稿枚数、体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

4. 懇話会要旨

- 「京都大学言語学懇話会」での発表の要旨を掲載する。原稿枚数は、A4 版用紙 1 枚とする。
- その他、スタイル等は、論文に準ずる。
- 原稿締切日は、発表当日とする。

5. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
 電話 / Fax: (075) 753-2827
 電子メール: KULR-edit@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

6. その他

- 原稿及び電子記録媒体は原則として返却いたしません。
- \LaTeX で執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 執筆者には、掲載号 1 部と抜き刷り 20 部を進呈いたします。20 部を超えて希望される方には実費にて増刷を行うことができます。

- 第 28 号は、2009 年 12 月発行を予定しています。
- 京都大学言語学研究室は、掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する権利を有するものとします。原稿は、京都大学学術情報リポジトリに公開します。
- 各著者が掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する場合は、その出典（号数、ページ数）を明記して下さい。

執筆者紹介

NAKAGAWA Natsuko (中川 奈津子)	京都大学大学院人間・環境学研究科
ASAO Yoshihiko (浅尾 仁彦)	京都大学大学院文学研究科
NAGAYA Naonori (長屋 尚典)	Department of Linguistics, Rice University
鈴木 博之	日本学術振興会 / 国立民族学博物館
稗田 乃	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
藤原 敬介	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
金澤 雄介	京都大学大学院文学研究科
川田 拓也	京都大学大学院文学研究科
武内 康則	京都大学大学院文学研究科 / 日本学術振興会
ワンプラディット アパサラ キク	京都大学大学院文学研究科
荒川 慎太郎	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
川澄 哲也	神戸市外国語大学非常勤
根呷 翁姆	西南民族大学藏学研究院

編集後記

『京都大学言語学研究』(第27号)の発行に際し、多くの方々からのご協力を賜りました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

本年度は『京都大学言語学研究』の電子化も始まり、弊誌がより多くの方にお読みいただけることと期待しております。現在は第26号のみの公開ですが、その他の号も順次電子ジャーナルとして公開していく予定ですので、下記 URL より是非ご利用ください。今後とも『京都大学言語学研究』をよろしく願いたします。

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bulletin/kulr>

編集委員長

『京都大学言語学研究』 第27号
Kyoto University Linguistic Research Vol. 27

2008年12月25日発行

編集委員長 高橋 淳一
副編集委員長 林 由華 山崎 瑤子
編集委員 浅尾 仁彦 金澤 雄介 川田 拓也 金 京愛 佐藤 昭裕
白井 聡子 申 英姫 スタニアク・シルビア 高橋奈津美
田窪 行則 武内 康則 田村 早苗 張 韜 富田 愛佳
中村 千衛 稗田 乃 松本 亮 藪 司郎 吉田 和彦
吉田 豊 ワンプラディット・アパサラ・キク (五十音順)
発行者 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話: (075) 753-2827 <http://ling.bun.kyoto-u.ac.jp/>

Edited by TAKAHASHI Jun-ichi HAYASHI Yuka YAMAZAKI Yoko ASAO Yoshihiko
KANAZAWA Yusuke KAWADA Takuya KIM Kyung-ae SATO Akihiro
SHIRAI Satoko SHEN Yingji STANIAK Sylwia TAKAHASHI Natsumi
TAKUBO Yukinori TAKEUCHI Yasunori TAMURA Sanae ZHANG Tao
TOMITA Aika NAKAMURA Chie HIEDA Osamu MATSUMOTO Ryo
YABU Shiro YOSHIDA Kazuhiko YOSHIDA Yutaka
WUNGPRADIT Apasara Kiku
Published by Department of Linguistics
Graduate School of Letters, Kyoto University
Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto
606-8501 Japan

京都大学言語学研究

第 27 号

論文

Information Structure and Intonation of Right-Dislocation Sentences in Japanese Natsuko NAKAGAWA & Yoshihiko ASAO & Naonori NAGAYA	1
チベット語における「心」「太陽」「月」の方言地理学的分析 — “香格里拉” と <i>sems kyi nyi zla</i> の対応に関連して —	鈴木 博之 23
クマム語形態音韻論におけるリズムの役割	稗田 乃 49
ウスイ語文法の概要	藤原 敬介 81
古サルデーニャ語における強変化タイプの完了形	金澤 雄介 125
ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について	川田 拓也 151
ブラーフミー文字で音注を附した漢文経典について — 北大 D020 『金剛般若波羅蜜経』 —	武内 康則 169
可能性を無くした「かもしれない」	ワンプラディット アパサラ キク 189

研究ノート

大英図書館所蔵夏蔵対音資料 Or. 12380/3495 について	荒川 慎太郎 203
从拉链的角度看青海方言元音 [i] 的舌尖化音变 — 兼与王双成先生商榷	川澄 哲也 213
道孚语的使用情况和语言活力 — 鲜水镇道孚语的个案研究 —	根呷 翁姆, 鈴木 博之 223
京都大学言語学懇話会 2007-2008 年度活動報告	241

2008

京都大学

大学院文学研究科

言語学研究室

Kyoto University Linguistic Research

Vol. 27

Articles

- Natsuko NAKAGAWA & Yoshihiko ASAO & Naonori NAGAYA:
Information structure and intonation of right-dislocation sentences in Japanese . . . 1
- Hiroyuki SUZUKI:
Analysis of the linguistic geography on the words ‘heart’, ‘sun’ and ‘moon’ in Tibetan
— Concerning the relation between “Xianggelila” and *sems kyi nyi zla* — . . . 23
- Osamu HIEDA: The role of rhythm in Kumam morphophonology 49
- Keisuke HUIWARA: *ufui bhafar ʃɔŋkhipto bækoron*. 81
- Yusuke KANAZAWA: The strong perfects in Old Sardinian 125
- Takuya KAWADA: The synchronization between fillers and gaze in natural discourses
— The case of Japanese poster sessions — 151
- Yasunori TAKEUCHI: The *Diamond Sūtra* as phonetically annotated in Brāhmī script
— A study of 北大 D020 preserved in the Peking University Library — 169
- Apasara Kiku WUNGPRADIT: On the direct evidential use of *kamo (shirenai)* 189

Notes

- Shintaro ARAKAWA: Tangut Buddhist fragment with Tibetan transcriptions:
Or. 12380/3495 preserved in the British Library 203
- Tetsuya KAWASUMI: A note on the apicalization of [i] in Qinghai dialect
— From a drag chain point of view 213
- Kun-dga’ dBang-mo & Hiroyuki SUZUKI:
Actual situation of the language use of sTau and its language vitality
— A case study of sTau spoken in Xianshui town — 223
- The annual report of Kyoto University Linguistic Colloquia 2007–2008 241



2008

Department of Linguistics
Graduate School of Letters
Kyoto University